

## 時間との対峙 イアン・マキューアン作『時間のなかの子供』

著者	佐藤 郁
著者別名	Kaoru SATO
雑誌名	東洋大学人間科学総合研究所紀要
巻	20
ページ	97-111
発行年	2018-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00009761/">http://id.nii.ac.jp/1060/00009761/</a>

## 時間との対峙—イアン・マキューアン作『時間のなかの子供』

佐藤 郁\*

“Time present and time past  
Are both perhaps present in time future,  
And time future contained in time past.” (118)<sup>1</sup>

現在と過去の時が  
おそらく、ともに未来にも存在するなら  
未来は過去の時の中に含まれる。(西脇順三郎訳)<sup>2</sup>

上掲の T.S.エリオットの詩「バート・ノートン」冒頭の一節は、『時間のなかの子供』(*The Child in Time*)の中で主人公スティーブンが物理学者の知人女性との会話中に想起したものであるが、作者イアン・マキューアン(Ian McEwan, 1948-)がこの小説を通し読者に伝えたかったことはこの3行に集約、凝縮されているように思われてならない。時間は過去・現在・未来という一本の糸の上でつながっているように見える一方で、ある時点の出来事と別の時点の出来事との間には何の関連性もないように思われることも多い。また人間は何か失敗があれば「終わったことは終わったこと」と言って、過去を現在や未来と切り離して考えようとするものである。読後に本作品のテーマは何であるかと振り返ってみると、主旋律は子供の失踪による夫婦関係の崩壊から修復に至るまでのストーリーによって示される人間性の回復であるが、背景でありながら曲の調を決定している副旋律は時間と対峙する人間の姿である。時間というものをどのような切り口からとらえるか。マキューアンが時間と人との関わりを「子供」という存在を軸にして考えようとしたのが本作である。本稿ではイアン・マキューアンの1987年発表作品『時間のなかの子供』で描かれる親・子・孫という縦糸と時間という横糸の織り成す世界を概観してみたい。

\* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学国際学部

## 1. 喪失の受容—時間との対峙

初めに小説のあらすじを概括する。作品は主人公のスティーブン・ルイスの娘ケイトが行方不明となる事件が発生してから約2年後の時点から始まる。2年前、ロンドンに住むスティーブンは当時3歳のケイトを連れてスーパーに買い物に行った。レジで会計の順番を待つ間、わずかに目を話した隙にカートの後ろにいたはずの娘が忽然と姿を消す。血眼の搜索も虚しく娘の行方はわからないままとなる。妻のジュリーとスティーブンは感情のすれ違いが続き、やがて妻は家を出ていく。児童向けの小説を出版し作家として生計をたてていたスティーブンは、英国政府が刊行予定の児童教育書を取りまとめるための小委員会の委員を委嘱され、会合への出席を続ける。スティーブンは体調を崩した母親を見舞い始めたのをきっかけに、自分の子供時代をふりかえるようになる。また、スティーブンの小説に目をとめ出版してくれた編集者チャールズ・ダークとその妻セルマとの交流も彼の正気を保つのに一役買っていた。しかしそのチャールズは将来を嘱望された政治家に転身しながらも心を病み、やがて自死してしまう。スティーブンは娘を失い3年間絶望の淵をさまよいながらも徐々に生きる力を取り戻し、妻との関係を修復するに至る。

まず本章では主人公スティーブンの人間性回復の過程における、いくつかの通過点に焦点をあてて検証する。

何らかの理由で子供を失った親の悲しみは大きく深い。その悲しみを癒すには長い時間が必要となるが、子を失った悲しみは決して消えてなくなることはないのではないか。ただその悲しみの深さを敏感に感じて心が痛むことが少なくなっていくだけである。何らかのきっかけや他の理由により、親は子を失ったという事実を受容し、子供なしで生きていく自分と向きあえるようになっていくからである。「親にとっての最大の不幸は子に先立たれることである」、「最大の親不孝は親より先に死ぬことである」といった言いかたを誰しも聞いたことがある。仏教では逆縁という。長い年月、手間、愛情そしてお金をかけて育てあげた子供が無事成人し社会人となり、経済的にも精神的にも親から自立し、そして家庭をもち子供自身が子を持つ身となり親の苦勞を知る。そして子供は年老いた親の面倒を見て、親を見送る。これが一般的な親と子、そして孫へと続く命のリレーであり、それが途中で断ち切られるとしたら、それは親にとって人生の概念を根底から覆される不幸なできごとであるに違いない。

本作品で語られるのも子を失った父親と母親の「喪失の受容」の過程である。母親は内にひきこもり、ただただ時間が過ぎるのを待とうとする。バイオリニストである彼女は難曲を自らに課し、苦行僧のようにひたすら練習に打ち込む。一方、父親はじっとしていることに耐えられず、子供の行方を捜して歩き回り、家では孤独を忘れるために酒をあおる。第三者から見るといづれも痛ましい姿であることに変わりはないが、母親であるジュリーの回復過程はスティーブンの視点から途切れ途切れに語られるだけであり、彼女の内面の絶望や葛藤は多くは描かれていない。

スティーブンの喪失受容の過程では、両親の訪問や妻との再会、チャールズ夫妻の訪問、たくましく生きる力をスティーブンに偶然分け与えることとなった人々との出会いなどがあった。

### 1-1. 愛された子供の発見

孫娘の失踪はもちろん祖父母であるスティーブンの両親にも大きな傷を与えた。しかしスティーブンよりも長い年月を生きてきた彼らには、息子よりも早くその事実を受け入れるだけの心の幅広さがあった。彼らがより心を痛めたのは、ケイトのことよりもケイトを失ったあとの息子夫婦のことだった。しかし立派な大人である二人にあれこれと口を出すことも難しく、これまではそっと見守っていたという様子であった。実際、娘を失った直後のスティーブンは次の引用のように感じ、まだ事実を受け入れられずにいた。

もしもケイトが見つかるべき運命にあるのなら、見つかるに違いない。(中略) そしてもし見つかる運命にないのであれば、やがては、分別と理性をもってその事実を直視しなければならなくなるだろう。(19)

スティーブンの母親が体調を崩したのをきっかけにスティーブンは両親を訪ねる機会が増え、彼らとの会話のなかで、かつて子供だった自分を再発見することになる。たいがい男親は子供に対しべたべたと接することはなく、愛情表現も直接的にはしないことが多い。一方、母親は世話焼きで直接的に愛情表現をすることが多い。スティーブンの両親もその典型で、大人になったスティーブンは父親に対しては少し距離を、母親に対しては気恥ずかしさを感じていた。本作の第4章では、軍隊に勤務する父親の赴任先であったアジアや中東、アフリカなどで過ごした子供時代の思い出がスティーブンの脳裏をよぎり、「父さん子」でもあったことを思い出す。母をおいて二人で出かけたドライブ、朝学校に行く前に父が自分の髪をなでつけてくれたこと。思春期に入ってからはずいぶん疎遠になり、実家の整理整頓ぶりも鼻につくようになっていたのだが、今はそれすらも自分という人間を形成した要素の一つであったことを理解する。

これらはすべて思春期のころのスティーブンには圧迫感のあるものだったが、いまは彼の頭をすっきりさせるのだった。頭から混乱が取り除かれてもっと肝心なことが考えられるようになるのだった。(86)

そしてある日、別居中の妻ジュリーの住まいへ向かう途中、スティーブンはあるパブの付近で突然不思議な感覚にとらわれる。

スティーブンは6月半ばの雨の日、ケント州内の支線道路の端に立ち、その場所とその日とを、記憶や夢、映画、忘れてしまった子供時代の旅行と関係づけようと試みていた。(中略) しかし、その土地の呼びかけてくる声や、訳知りな様子、その土地の引き起こす憧れの気持ちや根っこのない意味深長さなど、これらすべてのことからすると、なぜかは彼にもわからないものの、その土地の

騒々しさ（中略）の起源が彼の存在の外にあることは間違いないと思われた。(57)

パブの前でスティーブンは立ち尽くし、窓から中を覗き込むと若い男女が何やら話している。男はビールを次々と空けるが、女は目の前にある酒に手を出す気配がない。二人は深刻な面持ちで話し込んでいる。ふと女が目あげ、スティーブンのほうを見たのだ。しかし女にはスティーブンの顔が見えていない様子で、彼女が見ているのはスティーブンの先にある木立のようだった。スティーブンは怒りにも似た感情で、この男女が自分の両親であることを直感する。父にも自分は見えていないのである。

このあとスティーブンは一種のショック状態で妻の家にたどり着き、寝込んでしまう。後日スティーブンは母親から、結婚前にスティーブンを身ごもり、産むか産まないかの決断をそのパブでしたことがあったという話を聞かされることになる。母の話では、想定外の妊娠に動揺している恋人を前にして別れを考えていたそのときに、パブの窓の外に男の子の顔を見たような気がして、産むことを決断したのだという。スティーブンが経験した不思議な感覚は既視感と呼ばれるものである。生まれる前のスティーブン、まだ母親の子宮の中にいて何も見ることができないはずの彼が将来の母親に自分を中絶せずに産んでくれと訴えかけたかのようなものだ。

残念ながら母親がこのパブでの体験を語る部分は少女小説のような趣があり冗長で、作者が狙った効果が十分に発揮されているとは言い難い。このエピソードがなくともスティーブンは両親との関わりの中で両親の自分への愛情を認識し、自分に対する自信を回復したことを表現することは作者として可能であっただろう。マキューアンとしてはおそらく、このスティーブンの体験を「過去」と「現在」の接点として表現したかったのではないだろうか。しかし、いずれにせよ、自分で感じていた以上に自分が望まれて生まれてきた子供であり、両親に愛された子供であったことの理解は、娘も妻も失ったスティーブンにとって「この世に存在している意味」の確認へつながったのである。

このようにして少しずつ喪失感や自己嫌悪を克服していくスティーブンではあったが、愛する娘と妻を同時に失った悲しみと孤独が消えてなくなるにはまだまだ時間が必要だった。ケイトがいなくなって2年経ってもスティーブンは烈しく苦しんでいた。生きていれば来週6歳になるはずのケイトのことを思いプレゼントを買いいたいという強い衝動に襲われる。

もう何日もスティーブンは徒歩10分のところにあるおもちゃ屋に行きたいと思っていた。この考えはお笑いだった。(略) 本当は錯乱していないのに、錯乱しているふりをするのだ。(略) 愚かな人間、弱い人間のすることである。不必要な苦痛を味わうことになるだろう。(略) もしおもちゃを買えば2年間にわたる適応がご破算になる。不合理でわがままで自滅的な行為、そして何より、弱い人間のすることだ。現にある世界と願望のなかにある世界との区別を忘れてしまうのは弱い人間だ。弱い人間になるとスティーブンは自分に言い聞かせた。(略) 夢の前に屈してはだめだ。そっちに転がり落ちていってはいけない。(略) スティーブンは落ちてはいかなかったが、

落ちていきたいという気持ちは消せなかった。(125-126)

痛ましい限りの男の哀れな姿がここにある。自嘲、自己嫌悪、そして葛藤。愛された子供（自分自身）の発見が一つのステップになったことは確かだが、前を向いて生きていく力を完全に取り戻すにはまだ長い時間といくつかのステップが必要であった。

## 2-2. 生きている人々との出会い

親しい知人だったチャールズが大人社会で生きていくことを拒絶し子供に返ろうとしたことはステイーブンを大いに戸惑わせ、チャールズの正気を問うこととなった。人はいつ子供でなくなり、いつの時点から大人であると言えるのか—それは答えのない難問だ。何かに夢中になってひととき我を忘れて子供に返ることは誰しもあるだろうが、それはつかの間の休息のようなものでしかない。大人社会のしがらみから離れ子供に戻ろうとしたチャールズが自死を選ばざるを得なくなったのは必然の理であったと言えよう。一生子供でいることは誰もできないことを考えれば、チャールズは本当の意味で生きていたとは言えないのだろう。

武藤（2005）は論文のなかで二人の労働者（タンクローリーの運転手と貨物機関車の運転士）に着目し、この二人が単なる労働者ではなくステイーブスが精神力を取り戻す手助けをした人物であると的確に指摘している。筆者はもう一人重要な人物がいたと考えている。いわゆる「労働者」であるとは言えないが、ステイーブンと同じ委員会のメンバーのモーリーである。彼はステイーブンの自宅を訪ねた際、階段で転倒し怪我を負う。かなりの出血をして慌てふためくが、ステイーブンはてきぱきと手当てをしてモーリーを落ち着かせる。この場面は作品の終盤近くに挿入されており、その頃のステイーブンは最悪の状態は脱し、アラビア語の学習やテニスの練習を始めていた。金を払って人と関わり、人から叱咤激励を受けることを皮肉と感じながらも、妻をあてにすることなく自ら生きる力を回復するには何かに頼らなければならないことを認め、それを受け入れ始めていたのである。テニスのコーチはステイーブンに次のように言う。

あんたは受け身だ。あんたの精神は弱っている。あんた何かが起こるのを待っている。そこに立って、ことが自分の思い通りになるようにと願っているだけだ。あんたはボールに対して責任をとらない。次の行動に対して積極的に計算をしない。自力で動くことができない。根性がない。半分眠っている。自分のことが嫌いだ。(略)俺が話していてもいつだって上の空だ。(略)目を覚ませ！（157）

モーリーの怪我を手当するエピソードは、自分よりも弱い者を世話することで自信を回復する経験を表している。子供の世話と同じことで、自分が世話をしてやらなければ、今自分の目の前にいる男の出血は止まらないかもしれないし、傷口から菌が入って症状が悪化してしまうかもしれない。テニ

スのコーチに言われたように、目の前にあるものに対して自ら責任をとらなければならないと直観する。1週間に1度会う程度の特段親しいわけでもない赤の他人であるのだから、軽くあしらって早々に帰宅させることもできたはずなのに、スティーブンは何のためらいもなく甲斐甲斐しく手当をし、世話をする。

このようにかつてケイトを世話したように今またモーリーを世話することで、スティーブンは自分の中にある人間性を再確認することになったのである。ひと眠りして気持ちの落ち着いたモーリーはスティーブんに自分の家庭や自分の子供たちのことを話して聴かせる。モーリーの話は3人の子供を守り抜けるかどうかの不安に襲われ泣き出した妻のことだった。当時のテレビでは、米ソのオリンピック選手がケンカとなり、双方の国のコーチや監督をも巻き込んだ騒乱となり、核戦争勃発の危機にまで及んでいるとの報道がなされていた。子供は親を絶対的に信頼しているが、親は自分の無力さを知りながら何をすることもできないと言って妻は泣いたのだという。自分もケイトに対して、ケイトに差し迫っていた危機に対して無力で無頓着だったとスティーブンは感じ入る。ケイトは生きていて戻ってくるかもしれないが、「今はいない」という事実を受け入れ、生きていくしかない。テニスのコーチが言うように目を覚まして行動を起こすときが来ているのだ。このモーリーによっても生きる力を与えてもらうことのできたスティーブンはもう深みに落ちていくことはなかった。

モーリーが帰るとスティーブンはがらんとした娘の部屋にいき、明かりをつけた。(略)しばらく彼は床の上にしゃがんだまま自分の気持ちを確かめていた。いま彼が立ち向かっているのは喪失感ではなく、高い壁のようなひとつの事実だった。生命のない淡々としたものだった。「事実」と彼は、呪いの言葉でもあるかのように声に出していった。(略)彼は椅子の背にもたれ、自棄は起こさないぞと自分に約束し、やがて眠りに落ちていった。(163)

このモーリー来訪の場面の直前、スティーブンは次のように考えていた。

この数か月、彼は必ずしも幸せではなかったが、緊張病状態でもなくなっていた。彼は時々、今自分はまだ秘密にされている出来事に向けて訓練中なのだと感じるがあった。(158)

彼が少しずつ重ねてきた訓練の成果はモーリーの怪我の手当てで発揮され、そして、モーリーの子供の話を聞いた後もひどく落ち込むことなく眠りにつくことができるという力の回復を示している。あとは最終章でのジュリーとの関係回復のエピソードを待つばかりである。

## 2. 3人の失われた子供

本作に登場する名前のある実際の子どもはケイトのみであるが、『時間のなかの子供』には3人の子供が登場すると言ってよい。ケイトに加え、二人目の子供は主人公のスティーブン自身。ケイト失

踪後に両親を訪ねたのを契機に、忘れていた自分の子供時代のことなどを思い出す。三人目はスティーブンの知人チャールズ。チャールズは有能な政治家として将来を期待されながらも、大人の社会で折り合いをつけて生きていくことに心を病み、仕事を辞めて森にひきこもり「子供」に戻ろうとするがうまくいくはずもなく自死してしまう。以下に、この3人の子供についてもう少し詳しく見る。

## 2-1. ケイト

実はケイトについてはあまり多くは語られていない。作品はスティーブンの視点から書かれているが、なにせわずか3歳で突然行方不明となってしまったのだから、父親である彼には何もその準備ができていなかったのだ。もし別れることになるのであれば、何らかの方法で娘についての記録や記憶を残していたことだろう。スーパーのレジで会計の順番待ちをする間、一瞬目を離した隙にカートの真後ろにいたはずの子供が行方不明になるなど、誰も予想できないことである。作品のかなり早い段階でケイトが行方不明となり、ケイトの生死は不明のまま作品はエピローグまで進んでいく。ケイト自身のセリフもほとんど書かれておらず、もっぱらスティーブンの回顧の中に登場する子供である。

娘がいなくなって初めて父親であるスティーブンは親にとっての子供の存在意義を自問することになる。3歳といえはまだ服の着脱も手助けが必要な年齢で、衣食住の充足が親にとっての最大の仕事である。何を食べさせようか、何を着せようか、何をして遊ばせようか。風呂に入れて寝かしつけなければ。一日はそうのように過ぎていく。子供が生まれる前、時間はすべて自分のものだったが、子供が生まれたとたん親の時間は子供に圧倒的に奪われることとなる。もちろん子供は愛おしいが、面倒をみることを煩わしく思ったり、自分の時間の不足にいら立つことも珍しくないだろう。しかし、子供がいなくなったら子供が生まれる前の状態に戻れるのかと言えば、そうではない。スティーブンはいたときにはしげしげと見つめたことのなかった娘の顔を、狂おしいほどの思いで記憶の中で凝視し、道行く少女たちに娘の面影を探す。本論冒頭に掲げたエリオットの詩をからめてみると、いなくなったケイトは「過去」であるが、ケイトがいなくなったからといって過去がなくなるわけではなく、いないはずのケイトが現在も自分の中に存在し続けていることをスティーブンは強く感じる。その後もケイトの所在に関する手掛かりは一切なく、生死も不明のまま時が過ぎる。すると、4歳になったはずのケイト、少し成長したケイト、と自分では見ていない変化した娘を絶えず人ごみの中に探すようになる。

小説の最後で、スティーブンとジュリーは初めて、娘を失った深い悲しみを共有する。夫婦がこの深い悲しみを心から共有することができるようになるまで実に3年の月日を要したのだ。

「かわいい娘だった。かわいい女の子だったわね。」

スティーブンは頷いたが言葉はでなかった。そしてこのときはじめて二人は、3年遅れで自分たちの失ったかけがえのない子供のために一緒に泣いたのだった。その子は二人にとっていつまでも3



歳の子供であり続けるだろうし、その子らしい表情やしぐさは、時間の力によっても決して消し去られることはないだろう。(214-215)

ここでもまた時間と抗い、時間と対峙するスティーブンの姿が見える。3歳で突然いなくなってしまったかけがいのない可愛い娘。何物にも代えがたい存在だった娘。ケイトの思い出はたくさんあるし、ケイトについて言いたいことは山ほどある。しかし、顔をはっきりと思い出すこともだんだん難しくなってきた今、ケイトのことを表すには、「かわいい子」としか言いようがないのである。しかし、短いこの語に、どれだけの悲しみや思いが詰まっていることか。書かれてはいないが、スティーブンは恐らく、ジュリーの悲しみを当時ストレートに受け止めることができなかった自分を悔いたことであろう。

このように娘を失った夫婦の心の軌跡を追ってみると、ケイトという子供の存在は本作品を成立させるために不可欠だったのだと思われる。ケイトという子供からスティーブンが受けた影響を自身が振り返る場面がある。スティーブンは、まだ政務次官の身でありながら隠遁生活を始めたチャールズ夫妻を訪ねる。チャールズを探して森に分け入り、植物や昆虫に取り囲まれたスティーブンは、ふとケイトのことを思う——一切の邪念なく目の前のものに夢中になり、その世界に没入できるのが子供だと。スティーブンは、ケイトをコーンウォールの海岸に連れていったときのことを思い出す。

ケイトは最初からずっと本気だったのだ。ケイトの城づくりを手伝ったときのひたむきさ、あの日の懸命さをもって何事にもあたることができたら、俺も並はずれた能力をもった幸せな男になれるのにとスティーブンは思った。(106-107)

子供とともに砂の城づくりに夢中になっても、しばらく経てば帰路のことや夕飯のことが気になり始めて時計を見る——それが大人というものだ。しかし、そのように目先のことばかり追い、周りの目を気にするから何事も成し遂げることができないのだ、とスティーブンは自戒する。スティーブンはこのように、いなくなってしまったケイトから多くのことを学ぶこととなり、生きて前進するための力を得るのである。

もう3年ちかくなるのに依然として立ちすくみ、闇の中に囚われたまま、喪失に包まれ、その喪失に形づくられ、普通の感情の流れは彼の頭上はるかにあって彼の手の届かないもの、もっぱら彼以外の人間たちのものであった。彼は3歳の娘を思い出してみた。(略)無条件の信頼。思い出すがだんだんと難しくなっている。ケイトの姿はおぼろげになりつつあり、その間にもスティーブンの行き場のない愛は肥大化し続け、それはまるで甲状腺腫のように煩わしい思いをさせ、また彼を醜くしてゆくのだった。(略)望むことは、ただお前が戻ってくるように望むことだけだ。(130)

この部分をいまだ絶望にとらわれて前に進めないでいる姿ととるか、それとも希望を捨てないことを最後の砦として足を踏ん張っている姿ととるか。筆者は後者と考えたい。

## 2-2. スティーブン

ケイトが行方不明となって以降、夫と悲しみや苦しみを共有することができないまま、妻は彼の元を去る。夫婦はそれまで仲がよく何も問題はなかったのに、なぜ悲しみを共有することができなかったのだろう。娘の失踪が母親であるジュリーにとってあまりにも大きな衝撃で、それを受け止めることができなかったのかもしれない。感情を共有するには、一緒に涙を流して抱き合うか、言葉に出して悲しみを発露するか、が多いように思われるが、ジュリーの場合、感情をどのような形で表に出すことができなかった。そして、ジュリーの内なる感情をスティーブンはうまく汲み取り包容するだけの力がなかったのであろう。ある日の午後、ケイトのベッドが裸にされているのを見てスティーブンは腹を立てる。

女にありがちな自滅的行為、わがままな敗北主義的行為だと不愉快に思った。しかし、そのことについて彼女に話すことはできなかった。怒りの入り込む余地はなかった。そんな隙間はなかった。二人は泥沼にはまった人間のように身体を動かして、正面切って対決する力がなかった。すると途端に二人の悲しみは別々の孤立した分かち合うことのできないものになった。(略) 互いに我慢できないところが見つかり、悲しみとショックのせいでそれを乗り越えることができなかった。一緒に食事をとることさえもう耐えられなかった。(24)

スティーブンは、昼間はケイトの消息を追って街を歩き回り、夜はテレビをつけっぱなしにして酒をあおる生活が続く、自宅はだんだん荒れていく。妻の苦しみを少しでも癒そうと努めることを放棄し、このように自暴自棄になっていくスティーブンをなんとか正気にさせておくことができるものがいくつかあった。それは、政府から委嘱された「児童教育委員会」に週一回出席するときと、自分の両親に会うとき、そして友人のチャールズ夫妻に会うときであった。

スティーブンは両親を何度か訪ねるなかで、自分でも忘れていた子供時代の自分自身を思い出すこととなる。大人となった人間はしばしば自分がかつては子供であったことを忘れるもので、スティーブンも例外ではない。そしてこの「思い出し」の体験は、単に過去の出来事を思い出したというだけでなく、両親を親としてではなく二人の愛し合う男女として見直すことになり、また自分が「親に愛されている子供」だったことを初めて認識するという副産物をもたらしたのだった。自分は誰かに愛されているという自覚、認識は、自身の生を肯定することに他ならない。自分が一瞬目を離した隙にかけがえのない幼子を失ってしまった罪の深さにうちのめされていたスティーブンにとって、「こんな自分でも生きていていいのだ」という自覚は、生きる理由を彼に示す道しるべとなった。

窓から後ずさりしながら彼は泣いていたのかもしれない。夜中に目を覚ました赤ん坊のように泣き叫んでいたのかもしれない。(略)「僕にはいくところがない。僕に肉体を与えてくれるはずの瞬間がない。誰もぼくを待ってはいない。行き先も時間も言うことができない」と。(略)そして彼のこの思いが包みの結び目を解くこととなり、その中から彼自身のものではない悲しみが現れた。それは何百年、何千年の昔からの悲しみであった。その悲しみは彼の、そして無数の仲間たちの体のなかを、草原を渡る風のように吹き抜けていった。(60)

マキューアンは本作を書くようになったいきさつについて、著書 *A Move Abroad* (1983) の中で言及しているが、それによると当時マキューアン自身がまもなく父親になる予定だったとのことである。子供が生まれ親になるとはどういうことか、自分自身はどういう子供だったのかなど思いめぐらせたに違いない。自作の構想を練る彼の頭の中に浮かんだのは、自分でありながら自分でない人物がパブに向かって歩き、何か圧倒的に重要なものを目撃する情景だったという。本稿の第一章において考察したように、筆者はこの着想をもとにしたスティーブンの既視体験、母親のエピソード部分はやや陳腐と感じている。感じ方は読者によって異なるだろうが、マキューアンがこのエピソードによって、生まれていない子供・生まれた子供・生まれてくる子供という過去から未来への時間の流れを、そして過去と未来の間を行き来する人の心を描くことを試みたのだということができよう。

### 2-3. チャールズ

前述の *A Move Abroad* の同じ箇所に「自分の子供時代に帰ろうとした一人の男」(a man who attempts to return to his childhood)<sup>3</sup> という表現があり、これはチャールズ・ダークという人物の創作につながった。チャールズは作中に登場する首相に将来を嘱望された政務次官だった。スティーブンと知り合ったときは雑誌の編集者で、その後マスコミで活躍、のちに政治家に転身した人物として描かれる。つまり、弁舌はなめらかで世辞に長ける時代の寵児である。しかし、チャールズの心の闇は深かった。チャールズの死後、妻のセルマは次のようにスティーブンに説明する。

「子供になりたいという強迫観念がどこから来たものか、わたしたちはよく話し合った。あの人の過去に、もう一度生き直さなければならない何か、あるいは中途半端に終わって、最後までやり遂げなければならない何かがあるせいなのか。それとも、経験しそこなった何かの代償なのか。(中略) だからあの人には子供時代がなかったのかもしれない。」(202)

彼の心の奥底にある傷、それが母親を早くに亡くし、半ば無理矢理に早くに大人になることを強制されたことに原因があると妻のセルマは推察する。スティーブンのように親に愛されて育った子供という十分な期間を経て大人にならないと、心の歪みが生まれる可能性が高くなるという分析である。チャールズは当初、売春宿で仮装をすることで精神のバランスを保とうとしていたが、やがてそれも効

き目がなくなり、ついに政界を引退して妻とともに森に引きこもる。まるで少年のように自分の隠れ家であるツリーハウスを作り、1日の大半をそこで過ごすようになる。訪ねてきたスティーブンは、半ズボン姿でまるで子供のようなチャールズに招かれツリーハウスに上るが、少年を演じているかのようなチャールズの様子にすっかり驚かされる。スティーブンをきちんと認識している点からして、決して気がふれたわけではないということはわかるが、それにしてもこの常軌を逸した「子供返り」は何だろうとスティーブンはいぶかる。生まれた弟や妹に嫉妬して「赤ちゃん返り」する子供はめずらしくない。しかし、チャールズは立派な大人であり、しかも首相の寵愛を受ける政治家である。確かに政治の世界では、収賄、陥れ、はったりなどの醜いものが渦巻いている。しかしたいはいは其中で生き延びていくもので、政治家でない普通の大人も程度の差こそあれ、似たような醜い世界の中で生きているのであり、人間はそのような大人社会で生きていくことに折り合いをつけるものだ。大人になることを頑なに拒否し続ければ自滅しかない。セルマは次のようにスティーブんに説明する。

「あの人は時間から逃げたいとよく言っていた。(略) 子供であるということは、あの人にとって時間が存在しないということだったの。子供であるということについて、それが何か神秘的な状態であるかのように話していた。そうした状態にあの人は思い焦がれ、(略) 一方で、外ではお金を儲け、有名になり大人の世界の義務とか責任とかを何百もしよい込み、自分の内心の声から逃げていたんだわ。」(201)

スティーブンはケイトを失くして後に理解したように、子供というものは何かに夢中になればそれに没入し、目の前のものだけが世界の一切となる。そして子供は他者に対して責任を負わない。「ご飯ですよ」とか「帰りますよ」と呼ばれるまで遊び続けることができる。遊びが仕事であって、他者へのしがらみもない。自分の将来について思い煩うことがない——このように列挙すれば誰でも子供に帰りたと思うだろう。それは許されないことだ。だが、それでは大人によって回されている人間社会において子供が存在していることの意味とは何であろうか。大人の仕事や生活の邪魔にならないよう子供達すべてをどこかに隔離すればよいのだろうか。24時間、365日の保育が大人社会の理想だろうか。親は子供が生まれなければ親になることはできない。親になって初めて理解できることは多く、それは生まれて死ぬ運命にある人間として、そして人間が必ず親から命を授かる存在である限り、子供は親の一部であり、ある長さの時間を一緒に生きていく必然性があるはずである。

### 3. 時代のなかの子供 小説の構成と時代背景

本作品で主人公のスティーブンは英国政府の委嘱を受け、児童教育委員会の14の小委員会のひとつ「児童の読み書きに関する小委員会」に毎週出席していた。親委員会は小委員会からの意見を吸い上げ、最終的に一冊の教育書をまとめることを目指している。このような設定の小説において、各章は「英国印刷庁」の『検定 子育てハンドブック』からの一説を置くという構成をとっている。例え

ば第2章の冒頭には次のようにある。

時計には何を言っても無駄だとはっきり教えること。学校に行く時間、お父さんが仕事に出かける時間、お母さんが家事を始める時間、その時間の移り変わりというものは潮の干満と同様抗えないものなのだと。(27)

英国印刷庁(Her Majesty Stationary Office)は実在の政府機関であるが、『検定・・・』は架空の書籍名である。『時間のなかの子供』が発表されたのは1987年で、その作品の根底にはサッチャリズムへの批判がある。批判がこの作品の主題ではないが、マーガレット・サッチャー元首相としか思われえない人物をわざわざ登場させているほどである。(ただし首相の性別が特定されないよう、作者は注意深く書いている。)

サッチャー政権時代の特徴は民営化と規制緩和であるが、これによりイギリスの金融市場は外国資本に奪われ国内企業の衰退を招いた。また消費税の値上げによって貧富の差が拡大し、失業率が上昇した。作品のなかでも何度か物乞いの人々が描かれる。教育においては、学校教育に市場原理を導入して学校が質とランクを競い合うようにさせた結果、よい大学への合格者を多く出す学校の評判がある一方、大学へは行けないようなレベルの低い生徒たちへの教育がないがしろにされるという状況を生み出すこととなった。弱者の切り捨てである。各章の冒頭で『検定・・・』からの引用をあげ、親に対する一種の訓示を垂れるという構成をとることによって、本作品はこの時代の教育制度やサッチャリズムによって蔓延した社会への不信感を暗に述べたものだと言ってよいだろう。

ケイトが行方不明となって2年ほど経ったころ、スティーブンは政府によって許可を受けて物乞いをする一団の中に一人の少女を見つける。汚れた上着姿でシラミ対策のためか短髪の彼女に官給の容器を差し出されたスティーブンは札を入れるが、それに対して少女は敵意のこもった目つきで「死んじまえ。おっさん」と言い放つ。ケイトに似ているわけではないのにケイトの面影を彼女に追ったスティーブンは、このすさんだ少女の言動に心寒くなる。作品の終盤、セルマに呼び出されてチャールズのもとへ急ぐスティーブンはこの少女に再会する。凍てつく駅の構内で他の物乞い人たちとともに少女は外套も着ぬまま野宿していた。自分の外套をかけようとして、老人に少女が死んでいることを示唆され、警察に通報しようかと一瞬葛藤するが、危険の差し迫っているチャールズの元へ急ぐことを選択する。少女を助けるにはもう手遅れだと理解したからには、躊躇せず次の行動に移らなければならない。それはスティーブンがこの3年間に学んだことだった。

まともな教育も受けられずに物乞いし、あげくに凍死する少女や、政府から許可を受けた乞食と共存する社会、時代。それがこの『時間のなかの子供』で描かれた時代である。彼らに必要なのは政府主導でまとめられる児童教育の手引きではなかったことは明らかだ。

2016年6月に実施された国民投票の結果を受け、現在英国政府はEU(欧州連合)との離脱交渉を

進めている。しかし、もともと僅差での決着だっただけに、交渉難航の様子を前に早くも賛成に投じたことを後悔し始めた者もいると報じられている。離脱は数年後には実現するであろうが、その後の英国がどのようなものになるのかはまだはっきりとわかっていない。デヴィッド・キャメロン前首相（在任期間 2010 年 5 月—2016 年 7 月）は移民や難民の受け入れに対し融和政策をとることを基本姿勢としていたが、政権末期にはシリアなどの中東からの難民が押し寄せるようになり、移民制限の方向に舵を切り始めていた。しかし、首相の想像以上に国民はイスラム教徒や難民に対する抵抗感を強めていたのだった。離脱決定後、英国ではテロが増え、イスラム教徒だけでなく外国人全般に対する排斥ムードが高まっているという。EU 離脱後の英国で生まれ育つ子供たちがどのような時代のなかで生きていくのか、それを描く小説や映画がきっと登場することになるだろう。

作品の最終部分でスティーブンはセルマから妻ジュリーが妊娠していることを知らされ、妻のもとに駆けつける。先に挙げた、娘ケイト喪失の悲しみを初めて夫婦で共有したのはこの時のことであった。ケイトを失ったという事実をようやく共に受け入れ、初めて新しい命を迎える準備ができたと言えよう。ケイトが二度と戻って来ないとしても、ケイトはこれから生まれ来る子供の姉であることに変わりはない。人と人、子供と親は時間のなかで力強く繋がっている。EU から離脱した英国でそのことを疑問に思う人間が現れるようになったら、そのときは本当に英国は孤立するしかなくなるのではないだろうか。EU 離脱など予想もしなかった時代を背景に描かれた本作品であるが、今再読しても得るものは少なくない。

## 注

- 1 『時間のなかの子供』（*Child in Time*）（初版 1987 年）よりの引用は、すべて Ian McEwan, *Child in Time*（1988, London: Picador）によるもので、引用文末のカッコ内にページ数を示す。なお日本語訳は、真野泰訳『時間のなかの子供』（中央公論社、1995 年）を参照しつつ、筆者が訳したものである。
- 2 西脇順三郎・上田保訳『世界詩人全集 16 エリオット詩集』（新潮社、1981 年）。なお原典の T.S.エリオット作「バートン・ノートン」（Burnt Norton, 1936 年発表）は、1943 年刊行の『四つの四重奏』（*Four Quartets*）に収められている。
- 3 McEwan, Ian. *A Move Abroad*, Picador, 1983, p.xxv-xxvi.

## 参考文献

- 武藤哲郎（2005）「二人の労働者とサッチャー首相 マキューアンの『時間のなかの子供』」大妻女子大学『大妻女子大学紀要文系』37 号
- 研究社（2008）「英語青年」総号 1917 号（特集 イアン・マキューアン）
- Groes, Sebastian ed.. *Ian McEwan 2<sup>nd</sup> Edition*, Bloomsbury, 2013
- Hitchens, Christopher, *Civilization and Its Malcontents*, The Atlantic, 2005 April issue
- Katsutani, Michiko, 'The Child in Time,' The New York Times, 1987 September 26
- Malcom, David. *Understanding Ian MacEwan*, University of South Carolina Press, 2002

Nayebpour, Karam. *Mind Presentation in Ian McEwan's Fiction*, Ibidem, 2017

Spice, Nicholas, 'Thatchershaft' *London Review of Books*, 1987 October 1

William H. Pritchard (1998) 'Publish and Perish' (*New York Times Review* December 27)

## 【Abstract】

## Interpersonal Conflict with a Loss — Reading *Child in Time* by Ian McEwan

Kaoru SATO\*

Ian McEwan's *Child in Time* (1987), the author describes the process of how a father and his wife come to understand and accept the loss of their young daughter. They became despondent after her loss, but were unable to share their feelings with each other. Each of them had to confront their own despair and begin to overcome it separately. Steven, the main character of this novel, barely managed to maintain his sanity by attending committee meetings and visiting his elderly parents. Through these visits, he started to understand how he himself had been a child in the past. He came to recognize the meaning of having a child and also reached an understanding that he himself had been loved by his parents during his youth. The purpose of this paper is to examine the process of overcoming grief from loss and Steven's confrontation with finite time.

**Key word** : personal loss, temporal awareness, childhood, acceptance of loss, interpersonal conflict

イアン・マキューアン作『時間のなかの子供』においては、3歳の幼子を突然失い絶望の淵に落とされた夫婦のそれぞれの「喪失の受容」の軌跡が描かれる。夫婦は当初、娘を失った悲しみを共有できず、絶望との闘いをばらばらに始める。主人公のスティーブンは自暴自棄になりながらも政府委嘱の委員会への出席や両親宅の訪問を繰り返し、かろうじて精神のバランスを保つが、年老いた両親を訪ねるうちに、自身もまたかつては一人の子供であったことを認識する。子供を失って初めて「子供」というものの存在意義を問い直す経験をすると同時に、自分自身が両親に愛された子供であったことを理解するという経験をし、前に向かって生きていく力を再び得ることとなる。子供がいたことは「過去」の出来事となったが、その過去は現在や未来と切り離せるものではないことを、子供を失った今、はっきりと理解する。本作は夫婦が喪失という事実を受容するまでの過程を、人間の時間との対峙という視点から描くものである。

キーワード：喪失、時間、子供、受容、対峙

---

\* An associate professor in the Faculty of Global and Regional Studies, and a research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University